

＜幼児教育＞

友達と一緒に表現し合う活動を通して人とのかかわる力を育む

－表現し合う活動における幼児の変容から－

宜野湾市立宜野湾幼稚園 教諭 高原 真紀乃

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究仮説	2
III	研究構想図	2
IV	研究内容	3
1	幼児期の人とかかわる力の育成と基盤	3
(1)	幼児期の人とかかわる力の基盤	3
(2)	基本的な人とかかわりのあり方	3
(3)	幼稚園教育要領5領域との関わり	4
(4)	幼児教育において育みたい資質・能力の整理	4
2	表現について	5
(1)	表現とは	5
(2)	表現し合うことの意義	5
(3)	表現における教師の役割	5
3	記録方法	6
(1)	エピソード記述とは	6
(2)	エピソード記述の有用性	6
4	人とかかわる力を育むための年間指導計画	7
V	検証保育	9
1	主な活動名	9
2	ねらい	9
3	内容	9
4	活動設定の理由	9
(1)	教材観	9
(2)	幼児観	9
(3)	指導観	10
(4)	活動計画	10
(5)	本時の指導案	11
5	検証保育研究会	12
VI	仮説の検証	13
1	ビデオ記録とエピソード記述から幼児の変容を捉える	13
2	検証のまとめ	19
(1)	クラス全体・A児・B児の変容	19
(2)	保育の工夫	20
VII	研究の成果と今後の課題	20
1	研究の成果	20
2	今後の課題	20
	【註釈】	20

友達と一緒に表現し合う活動を通して人とかかわる力を育む

ー表現し合う活動における幼児の変容からー

宜野湾市立宜野湾幼稚園 教諭 高原 真紀乃

I テーマ設定理由

近年、少子化や核家族化、都市化による遊び場の消失化がすすみ、家庭や地域の中で人とかかわる経験が少ないまま育ってきている幼児が多い。人間関係の希薄化に伴い、人とかかわる力が弱くなっているという懸念がある。このような幼児の生活実態の変容に対して、様々な保育課題が挙げられている。

文部科学省による『幼稚園教育要領』（1998）の領域「人間関係」では、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」⁽¹⁾と示されている。このことから、幼稚園において人とかかわる力を育てていくことが求められていると考えられる。

畠山(2003)は、幼児が人とかかわりを通して育むものとして、「コミュニケーション能力やきまりを理解し、守る力、思いやりをもつ心、いざこざを解決する力」⁽²⁾と述べている。このように、人とのかかわりによって、幼児にさまざまな良い成長が得られることを踏まえ、幼児が人とかかわりをもてるように教師が保育を工夫していくことは重要なことであると考えられる。

本園の幼児の実態として、明るく活発に遊び、ままごとや忍者ごっこなど様々な活動を楽しんでいるが、一方で自分の思いが伝わらない場合に、喧嘩になり腕力で解決しようとする子どもがいる。また、自分の思いを話すことができずにその場から離れ、遊びをやめてしまう子どももいる。活動が続かないことは、自己抑制や自己主張の弱さ、そして、自己表現の乏しさによるお互いの思いの通い合いができないことが要因だと考えられる。このような場面について、これまでの私の保育を振り返ってみると、一人ひとりへ言葉かけを行い、両者の思いを聞き合うようにしていたものの、活動が創られる過程において幼児同士がつながっていく援助が不足であったことが反省として挙げられる。

幼児が自分の思いを表現したり、伝えようとしたりするためには、何よりも安定した温かい人間関係の中で、自己表現への意欲が受け止められることが必要であると考えられる。

幼児は、自分の思いを表現し、その表現が受容されると喜びを感じ、共に活動を創っていく楽しさを味わう。そして、表現が豊かになり、友達と活動を継続していく過程に人とかかわる力の育ちが期待できる。

そこで本研究では、教師が幼児理解をし、幼児の興味関心を取り入れ、保育を工夫した表現し合う活動を通して、人とかかわる力が育まれるのではないかと考えた。なお、効果を検証するために、エピソード記述により、幼児の変容を見取っていく手法を用いることとする。

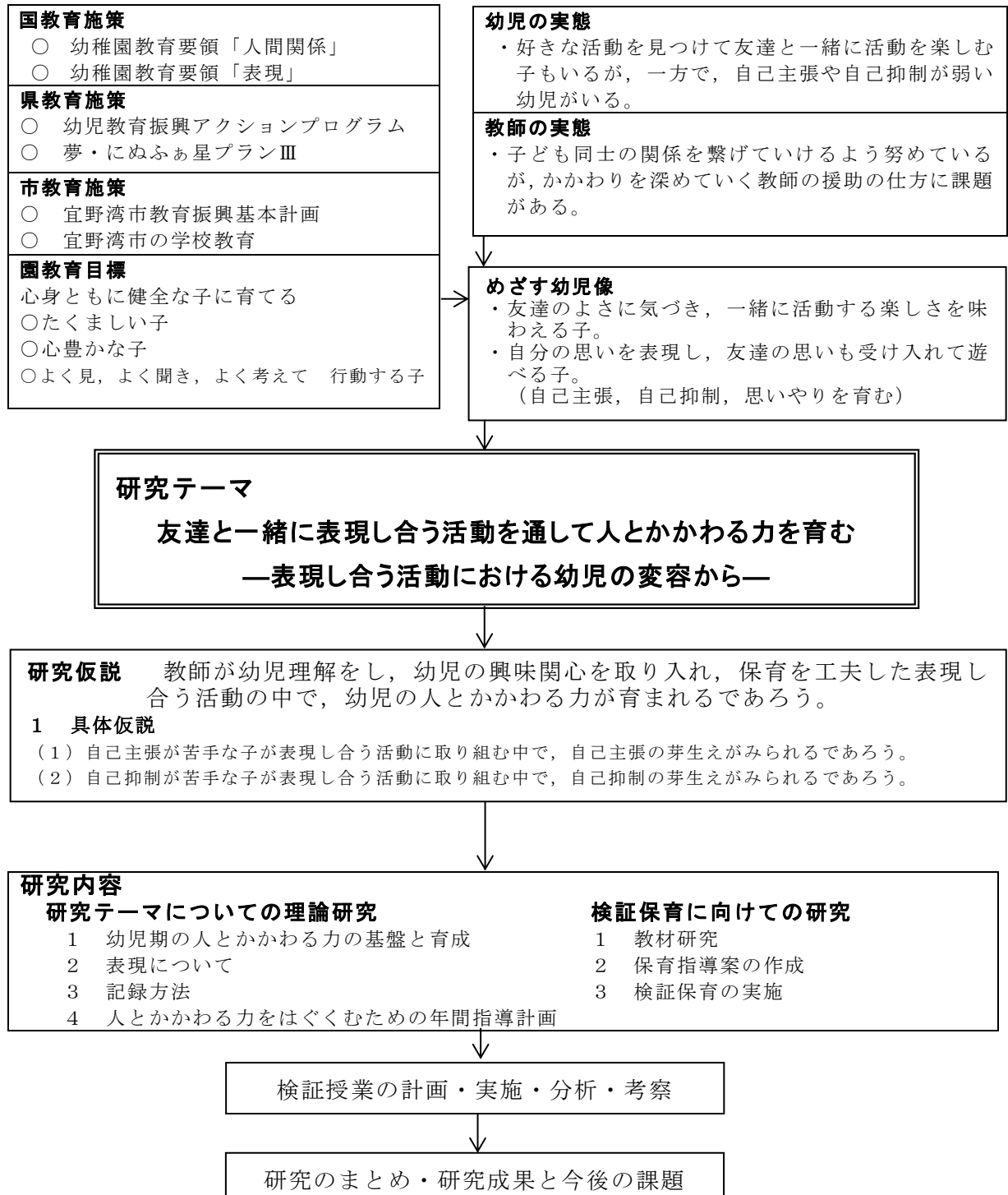
Ⅱ 研究仮説

教師が幼児理解をし、幼児の興味関心を取り入れ、保育を工夫した表現し合う活動の中で、幼児の人とかかわる力が育まれるであろう。

1 具体仮説

- (1) 自己主張が苦手な子が表現し合う活動に取り組む中で、自己主張の芽生えがみられるであろう。
- (2) 自己抑制が苦手な子が表現し合う活動に取り組む中で、自己抑制の芽生えがみられるであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

1 幼児期の人とかかわる力の基盤と育成

(1) 幼児期の人とかかわる力の基盤

『幼稚園教育要領解説』（文部科学省，1998）の中では，「人とかかわる力の基礎は，自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもち，さらにその信頼感に支えられて自分自身の生活を確認していくことによって培われる」⁽³⁾と述べられている。

幼稚園生活において，まず教師との信頼関係を築いていくことが重要である。これを基盤として幼児が安心して自分の力で行う充実感や満足感を味わえるようにすることが大切である。

また，幼児は，幼稚園生活において自分の感情や意思を表現しながら，他の人々と共に活動する楽しさを味わい，時には，幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合うようになる。このような生活の中で，人とかかわる力が育まれるのである。

幼稚園において，幼児が人とかかわる力が育まれる過程を図1で表した。

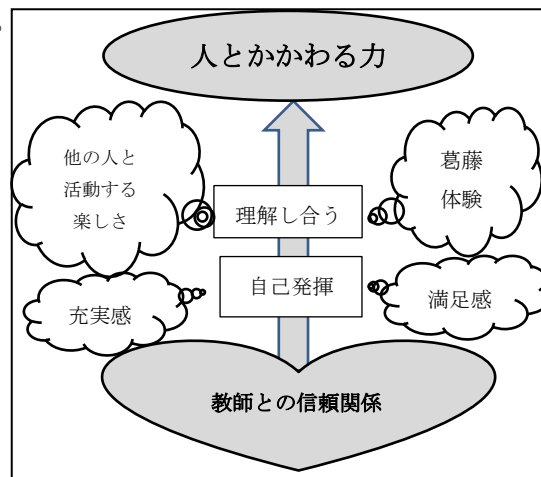


図1 幼稚園において人とかかわる力がはぐくまれる過程

(2) 基本的な人とかかわりのあり方

砂上(2001)は，遊びを通して育っていく基本的な人とかかわりのあり方を3つの視点に絞って述べている。⁽⁴⁾これを表2にまとめる。

表2 遊びを通して育っていく基本的な人とかかわりのあり方

自分の気持ちを出すこと (自己主張)	例えば，他の子ども達がやっている遊びに加わりたと思ったら「入れてほしい」ということを表さないことには，自分の思いを実現したり遊びの楽しさを味わったりすることができない。子どもは自分の気持ちを表せないことの悔しさやもどかしさを経験しながら，少しずつ自分の気持ちを他の子ども達に伝えられるようになり，自分らしさを発揮して遊ぶことができるようになっていく。
自分の気持ちを抑えること (自己抑制) ーいざこざを通してー	子ども同士と一緒に遊ぶ場合には，それぞれの思いがぶつかり合っていざこざなどのトラブルになることもある。そうしたさまざまな経験を通して，子どもは少しずつ，叩いたりなどの身体的攻撃をしないこと，我慢すること，ルールに従うことなどの自分の気持ちを抑えることを学んでいく。
他者の気持ちに気づくこと (思いやり)	自分の気持ちを抑えたり主張したりするというかかわりと密接にからみ合いながら，子どもは他者の気持ちに気づくようにもなっていく。他者の気持ちに気づくということは，相手の立場に立って物事をみることや，他者の気持ちを自分のことのように感じるなどに通じる。そうしたことから他者の気持ちを思いやるような行動が遊びの中でみられるようになる。

※砂上史子(2001) 89頁を参考に著者が作成

本研究では，この3つの視点から考慮しながらクラス全体と抽出児をとりあげ，その変容から検証を行っていきたいと思う。

(3) 幼稚園教育要領 5 領域との関わり

『幼稚園教育要領』（文部科学省，1998）では，発達 の側面から心身の健康に関する領域「健康」，人 とのかかわりに関する領域「人間関係」，身近な環境 とのかかわりに関する領域「環境」，言葉の獲得に 関する領域「言葉」，感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ，示している。幼稚園では，これらに示す「ねらい」が総合的に達成されるよう教育を行うことにより，生きる力の基礎を育成している。このことから，人とかかわる力は，領域「人間関係」で単独に身につけていくのではなく，5 領域が相互につながり合うことで育つと考える。

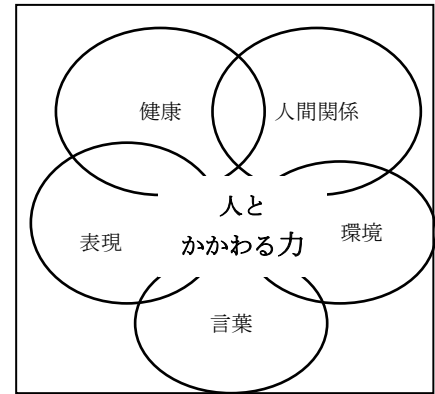


図3 5 領域との関わり

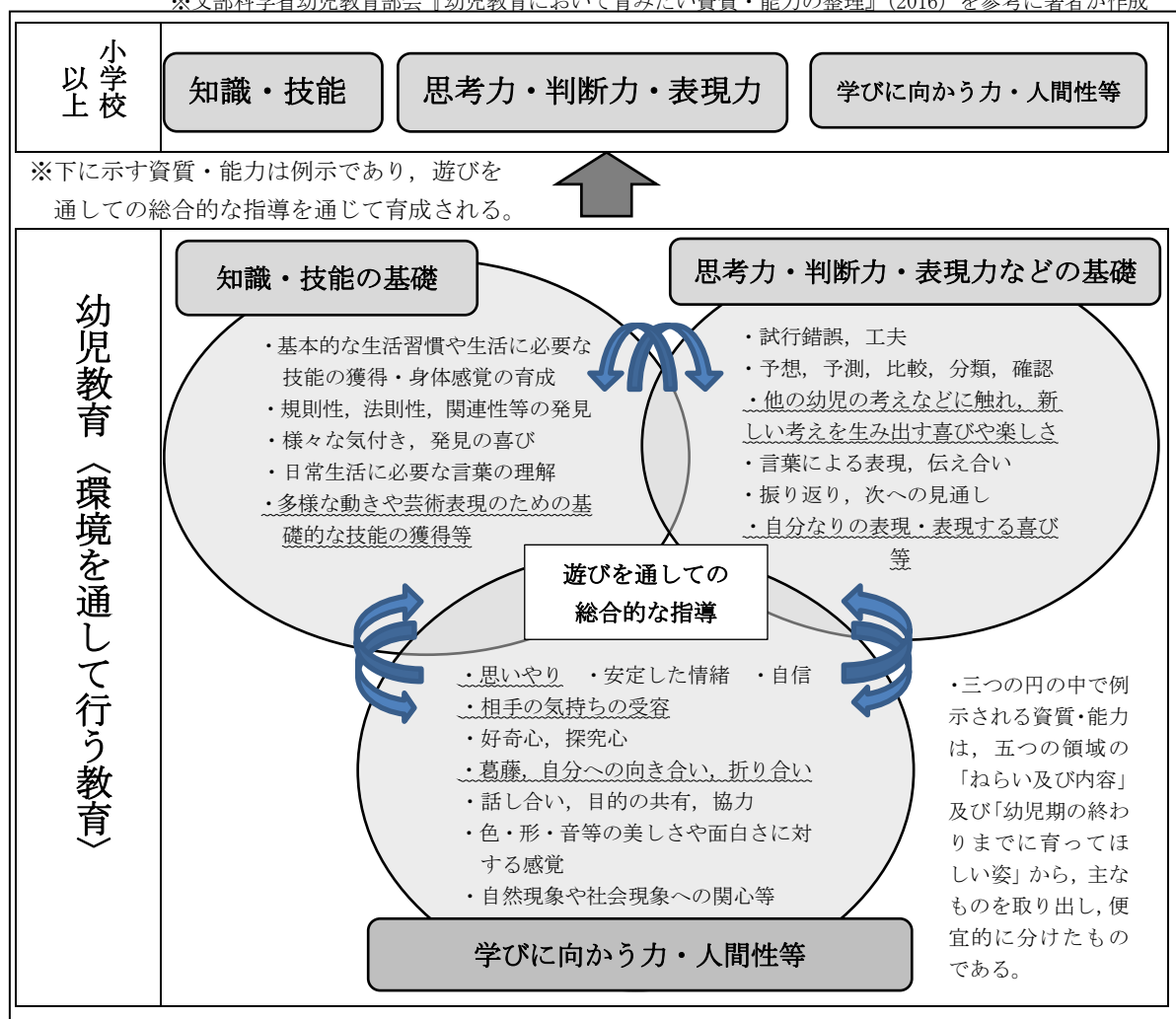
本研究は，主に「人間関係」と「表現」との関わり の視点から検証していく。

(4) 幼児教育において育みたい資質・能力の整理

文部科学省幼児教育部会から『幼児教育において育みたい資質・能力の整理』（2016）が示されている。⁽⁵⁾ この中で，本研究に関連する，人とかかわる力と表現というキーワードを，波線「~~~~~」で表示をして，図3にまとめる。

図3 幼児教育において育みたい資質・能力の整理

※文部科学省幼児教育部会『幼児教育において育みたい資質・能力の整理』（2016）を参考に著者が作成



これらのことから、幼稚園教育は、『幼稚園教育要領』の5領域に基づき、遊びを通しての総合的指導であると捉える。そして、幼稚園教育は、小学校教育へ直結することを目標とするものではなく、小学校以上において、後伸びする力を養うことを念頭におき、将来への見通しをもって、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであると考えることが大切である。

2 表現について

本研究では、幼児の人とかかわる力を育むために表現し合う活動から検証していく。表現についてまとめてみる。

(1) 表現とは

表現とは、黒川（1990）によると、「感じたこと・考えたことを外に表わし出す営みである」⁽⁶⁾と述べている。このことから、表現とは、感じ考える心の動きを表わす行為であり、自己主張の手段であると捉える。

(2) 表現し合うことの意義

『幼稚園教育要領解説』の領域「表現」において、「幼稚園においては、日常生活の中で出会う様々な事物や事象、文化から感じ取るものやそのときの気持ちを友達や教師と共有し、表現し合うことを通して、豊かな感性を養うようにすることが大切である。」⁽⁷⁾と示されている。このことから、表現し合うことは、自己表現から始まるものだと考える。自己主張や自己抑制などの、人とかかわりを育てるうえで重要であると考え

(3) 表現における教師の役割

砂上（2010）は、教師の役割の留意点について『幼稚園教育要領』の領域「表現」の「3 内容の取り扱い」に基づいて述べている。⁽⁸⁾ これらをまとめてみる。

表4 表現における教師の役割

※砂上史子（2010）29頁を参考に著者が作成

① 子どもが感じとるものとしての環境を意識する
『幼稚園教育要領』 領域「表現」の「3 内容の取り扱い」 (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。 ・領域「表現」では、表わすことだけでなく、感じることも重視している。教師は、子どもが感じとるものとしての環境を意識することが求められている。 同時に、子どもが感じた美しさや面白さは、子ども個人のなかで完結するものではなく、身近な教師や他の子ども達と共有することで、より確かな形で子ども達に伝えていくことも重要になる。したがって、教師自身が豊かな感性をもち、日々の生活のなかにある美しさや面白さをきめこまかに感じ取って、子ども達に伝えていくことも重要となる。日常のなかにある美しいもの、優れたもの、心を揺り動かすものに対する感性と、それを子ども達に伝える表現力が保育者に求められる。
② 子どもの気持ちを読み取り、返す
『幼稚園教育要領』 領域「表現」の「3 内容の取り扱い」 (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自信の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。

- ・子どもがさまざまな活動のなかで表わしたものを、保育者が丁寧に受け止め、言葉や動きで返していくことで、子どもはさらに表現することに意欲的になる。それは「表現」と呼ぶには素朴でささやかであるかもしれないが、それを見落とさないことが重要である。
- ・自分なりの表現を受け止めてもらえた、理解してもらえたという喜びが、表現することの意欲と自信につながっていく。

③ 子どもが表現を生み出すための環境を構成する

『幼稚園教育要領』 領域「表現」の「3 内容の取り扱い」

(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

- ・表現は、子どもが周囲の環境とかかわって展開する具体的な活動のなかで、さまざまな形で生み出される。したがって、教師には、子どもが表現しやすく、またしたいと思えるように、場や物などの環境を適切にかつ柔軟に構成することが求められる。
- ・さまざまな素材を用意しておくことで、子どもの表現に対する意欲が高まり、アイデアも豊かになる。
- ・子どもがじっくりと製作に取り組める場や、他の子の作品にふれられる展示の仕方なども、環境として重要となる。

以上のことから、教師は豊かな感性をもち子ども達に感じ取るものとしての環境を意識し伝えていき、また、子どもが表わした表現を受け止め、返したり、表現を生み出すための環境を構成するなどの援助を行っていくことが大切であると考えます。

3 記録方法

幼稚園教育は、幼児一人ひとりの発達の特性に応じた指導を基本としている。それゆえ、幼児の行動を記録することを通して、幼児理解を深め、教師の援助の工夫や次の指導計画の作成に繋げることが重要である。

よって、本研究では、幼児理解を深めた記録にするために、ビデオでの記録とエピソード記述を用いる。

(1) エピソード記述とは

エピソード記述とは、『保育用語辞典第5版』によると「ある特定の具体場面を、そこに関係する人物の行動やかかわりの展開に留意して、できるだけ詳しく記述したもの」⁽⁹⁾と記されている。

(2) エピソード記述の有用性

鯨岡(2009)は、エピソード記述を行う際は、「①保育の担い手である保育者が子どもたち一人ひとりとのあいだで経験したさまざまな事柄を保育者自身がエピソードに描き出すこと、②その描き出されたエピソードを他の保育者に読んでもらうことを通して、自分の保育を振り返る手掛かりにすること、③そのようにして保育者同士の経験を交叉させて、保育の中身を吟味し、園全体の保育の質を高めようと努めること、④そのことによって、子ども一人ひとりを丁寧に保育するという理念の実現に繋げていくこと」⁽¹⁰⁾と述べられている。

このようなエピソード記述を用いて保育を描き出し、幼児の内面の変化を見取るとともに、園の職員に協力してもらい、保育カンファレンスを行い、自分自身の保育実践を客観的に振り返り、教師の援助の工夫に努めていく。

4 人とのかかわる力を育むための年間指導計画

幼児の発達の過程を理解して、幼児の実態を把握し、幼稚園の一年間の子ども達の育ちを見通したねらい、教師の援助と配慮、主体的な遊びを取り入れた年間計画を見直し作成した。

		I 期（4月～5月）	II 期（6月～7月）	III 期（9～10月）
育ちの節目		◎教師とのかかわりで安定する時期	◎園生活の中で安定し、気の合う友達とかかわりながら遊びを広げていく時期	◎友達を受け入れ、リーダー中心にまとまろうとする時期
ねらい		・先生や友達との生活に親しみをもつ。 ・自分の好きな遊びを見つけて、安定感をもって遊ぶ。	・友達と一緒に色々な遊びを進めていく楽しさを知る。 ・友達と一緒に、夏ならではの遊びに取り組んだり、挑戦したりして遊ぶ。	・友達の中で自分の力を試しながら体を動かして遊ぶ。 ・目的に向かって友達と一緒に取り組む楽しさを味わう。
指導内容		・園生活の仕方を知る。 ・教師や友達に親しみを持ち、安心して過ごす。 ・友達とかかわりをもって遊び、気の合う友達を見つける。	・友達とのかかわりをもって遊び、気の合う友達を見つける。 ・色々な材料や用具を使い、工夫して作ったり、作った物で遊んだりする。	・友達の様々な気持ちに気づきながら、一緒に活動を進める。 ・様々な運動に親しみ、力いっぱい体を動かす心地よさを味わう。
みんなでかかわる活動	主体的な遊び	ままごと・ブロック・積み木・粘土・パズル・描画・絵本を見る・歌を歌う・手遊び・製作遊び・砂場・泥団子作り・固定遊具・お家ごっこ・レストランごっこ・ヒーローごっこ	ままごと・ブロック・粘土・色水遊び・ジュース屋さんごっこ・シャボン玉・廃材を使って製作遊び・大型ソフトブロック・ゆらゆら橋・固定遊具・コンサートごっこ・砂場遊び・虫取り・魚つりごっこ	ままごと・固定遊具・粘土・色水遊び・かけっこ・サッカー・鬼ごっこ・縄跳び・運動会ごっこ（玉入れ・バトンリレー）・リズム・エイサー・お化け屋敷ごっこ・キャンプごっこ
	行事	・入園進級式・こいのぼり集会・誕生会（毎月）・春の遠足・交通安全指導・避難訓練・保育参観日	・良い歯の表彰・平和集会・避難訓練・誕生会（毎月）保育参観日・プール・七夕集会・1学期終業式	2学期始業式・運動会・保育参観日・誕生会（毎月）
☆教師の援助 ◆環境構成		☆教師は、個々の子どもと触れ合いを多くもちながら、温かく受け入れ安心感をもたせる。 ☆遊びや生活をしていく中で、園生活の過ごし方や基本的な生活習慣の必要さを感じられるように、個々の発達に応じて援助をしていく。 ◆遊びの様子を見ながら、遊具や場を用意する。	☆ダンスやごっこ遊びなどに教師も加わったりして、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わせていく。 ☆友達と一緒に試したり、工夫したりできる遊びを取り入れ、友達と遊ぶ楽しさが味わえるようにする。 ◆遊びに必要な用具や子供達のイメージに合った材料を用意していく。	☆子ども達の考えを受け止めながら、同じ目的や興味をもって遊びが進められるように援助する。 ☆自分で考えたことや友達と相談し合って決めたことを遊びに取り入れ、互いに刺激し合っにかかわれるようにする。 ◆子どもの運動的な遊びへの興味に応じて必要な用具を整えておく。

		Ⅳ期（11月～12月）	Ⅴ期（1月～3月）
育ちの節目		◎友達とイメージを伝え合い、力を合わせてやり遂げる楽しさがわかる時期	◎友達と協力し合い、活動を展開していく時期
ねらい		○自分達でルールを決めたり、ルールのある遊びを楽しむ。 ○友達と考えを出し合いながら一緒に共通の目的に向かって遊びを進める楽しさを味わう。	○友達との信頼関係を深め、互いのよさを認め合いながら生活する。 ○友達と一緒に共通の目的に向かって協力し合いながら遊びを進め、充実感を味わう。
指導内容		・色々な遊びに興味をもってかかわりながら皆と一緒に活動することの楽しさを味わう。 ・友達と相談したり協力しながら、共通の目的に向かって取り組む。	・友達と共通の目的に向かって活動し、喜びや充実感を味わう。 ・これまで経験してきたことを友達と出し合い、取り入れながら遊ぶ楽しさを知る。 ・自分達で遊びや生活を進めていこうとする。
みんながかかわる活動	主体的な遊び	竹馬・縄跳び・フラフープ・ホッピング・ポックリ・長縄・ケンパー・サッカー・タイヤ渡り・楽器遊び・コンサートごっこ・山の音楽家ごっこ・固定遊具・ままごと・木の実や落ち葉を使って製作遊び・泥団子作り・砂遊び	こままわし・羽根つき・凧揚げ・まりつき・お手玉・けん玉・ドッジボール・かるた・すごろく・郵便ごっこ・竹馬・縄跳び・フラフープ・ホッピング・ポックリ・長縄・ケンパー・サッカー・タイヤ渡り・固定遊具・楽器遊び・リズム遊び
	行事	秋の遠足・消防署見学・誕生会（毎月）お楽しみ会・2学期終業式	3学期始業式・ムーチー作り・豆まき・生活発表会・カレーパーティー・誕生会（毎月）1年生との交流会・給食試食会・お別れ遠足・ひなまつり・お別れ会・修了式
☆教師の援助 ◆環境構成		☆子ども達が遊びのルールを考えたり、必要な物を準備したりする様子を見守り、子ども達から要求された物を提供したり、じっくりと遊び込める場の確保をしたりしていく。教師は、子ども達が主体的に遊びを進めていけるように援助に徹し、満足感と友達と遊ぶ楽しさを味わえるようにしていく。 ☆一人ひとりが自分の持ち味を十分に発揮し、自信をもって遊びを進めていけるよう、その子のよいところやがんばりを皆に伝えていく。	☆学級全体やグループで取り組む楽しさを感じられるようにしながら、その中で個々の取り組みを認め、やり遂げた満足感や喜びが味わえるようにする。 ☆友達同士でルールや約束を確認し合いながら主体的に遊べる遊びを取り入れる。 ☆自分達で考えたり、友達と話し合っ決めてたりしたことを主体的に遊びに取り入れられるようにする。 ◆遊びがじっくりと進められる場や時間を確保する。

V 検証保育

検証保育指導案

平成28年12月15日（木）

男児10名 女児19名 計29名

保育者 高原真紀乃

指導助言者 中尾達馬

- 1 主な活動名 山の音楽会をしよう
- 2 ねらい ○友達と一緒に表現する楽しさを味わう。
- 3 内容
 - ・友達と一緒に歌を唄ったり楽器を使ったり等して表現を楽しむ。
 - ・友達のさまざまな表現を見て楽しむ。

4 活動設定の理由

様々な音楽を通して楽器に親しむ中で、歌の内容のイメージを膨らませて表現を楽しむようになってきた。幼稚園教育要領の領域『人間関係』内容（8）に「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」とある。また、『要領解説』において、「イメージや目的を共有し、それを実現しようと、幼児たちが、ときには自己主張がぶつかり合い、折り合いをつけることを繰り返しながら、工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を味わうようになっていく」とある。

そこで、教師が学級活動を通して、友達と一緒に表現する楽しさを味わえるような場を設定する。教師が適切な幼児理解をし、幼児の興味関心を取り入れ、保育を工夫した表現し合う活動の中で、幼児の人とかかわる力が育まれるであろうと考え、本活動を設定した。

（1）教材観

童謡の『山の音楽家』を通して、クラス全員で山の音楽会を開くというイメージを膨らませていく。そして、好きな楽器を選び、グループに分かれて友だちと表現し合う活動に取り組む過程において、互いの思いや考えを伝え合い、自己主張したり、相手の考えに耳を傾け取り入れたりするなど、折り合いをつけながら音楽会を行っていく。歌のイメージを膨らませながら楽器を作ったり、小道具を作ったりなど、友だちと共に協力しながら、さまざまな表現をする中で、人とかかわる力が育まれると考える。

（2）幼児観

自ら選ぶ好きな活動においては、友達に思いや考えを伝え合いながら遊びをすすめている幼児が多い。しかし、一方では、まだ自分の思いや考えを言葉や態度で表すことができない幼児もみられ、個人差がある。クラス全体を見ると、自分の思いや考えを強く主張する幼児と、うまく伝えることができない幼児との差が見られる。自己主張が強い幼児同士が言い合いになることが多い。

そこで、本時ではこれまでの活動を表現し合う場を設定する。友達と一緒に楽しく表現し合う活動に取り組む過程において、人とかかわる力が育まれる活動にしていきたい。

(3) 指導観

音楽会にむけて、自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを聞き入れたりし、工夫したり、協力したりして遊ぶ経験ができるようにしたい。その表現し合う活動に取り組む過程において、自己を主張したり、折り合いをつけたり等、自己主張や自己抑制の芽生えがみられることができるように援助していきたい。

(4) 活動計画

時期及び月日 ○ねらい・内容	☆教師の援助◆環境構成
12月1日～2日 ○物語や歌に親しみ、友達と一緒に楽器を使って歌を楽しむ。 ・「おもちゃのチャチャチャ」の手作りペープサートを見る。	☆一人ひとりの思いや考えを丁寧に受け止めていきながら、他の幼児の思いにも気付いていけるような言葉かけをする。 ◆子どもが物語や歌の内容のイメージをもち、表現することができるように、歌のペープサートや楽器を手に触れる所に置き、環境を整えていく。
12月5日 ○友達と一緒にイメージしたことを製作などで表すことを楽しむ。 ・材料を使って自分のイメージする楽器を作る。	☆一人ひとりの考えやイメージを丁寧に受け止めながら、さらに発想が広がるように言葉かけを行い、楽しく楽器作りができるように援助する。 ◆子ども達がイメージした楽器を作ることができるように、空き箱、空き缶、割り箸、画用紙など色々な材料を準備する。
12月6日 ○友達と一緒に歌の内容のイメージを膨らませながら歌を楽しむ。 ・手作りスタンドグラス紙芝居「きらきら星」を見る。 ・楽器に触れて音を親しむ。	☆歌の内容のイメージを頭の中で膨らませていくことができるように紙芝居を工夫し、効果音として楽器を用いて雰囲気作りを行う。 ◆友達と一緒に歌の内容のイメージを膨らませ、楽しく表現できるように、楽器をすぐに手に取れる所に用意しておく。
12月7日 ○友達と一緒に踊る楽しさを味わう。 ・絵本「エイサーだいこでちむどんどん」を見る。 ・皆でエイサーを踊る。	☆友達と一緒にエイサーの踊りを楽しむことで、みんなで一緒に活動することの楽しさを感じられるように、言葉かけや教師自身も楽しむ等の雰囲気づくりを大切にする。 ◆子ども達が興味をもっているエイサーの音楽を用意し、自由に踊りに使えるようにパーランクーも手に取れる場所に準備しておく。
12月8日～14日 ○グループの友達と共通の目的に向かって協力して取り組む。 ・グループの友達と楽器を作ったり、小道具を作ったりする。 ・山の音楽会に向けて活動をする。	☆友達と一緒に作ったり、作った物で遊びながら友達と互いに協力して互いに共通の目的に向かって取り組むことができるように援助する。 ◆グループの友達と一緒にアイディアを出し合いながら小道具を作っていけるように必要な材料を準備しておく。
12月15日（本時）公開保育 ○友達と一緒に表現する楽しさを知る。 ・友達と一緒に歌を唄ったり楽器を使ったり等して表現を楽しむ。 ・友達の様々な表現を見て楽しむ。	☆一人ひとりの表現を受け止め、友達の表現のよさにも気付いていけるような言葉かけをしていく。 ☆友達と協力して楽しく表現できるように見守りながら、必要に応じて声かけ等の援助をしていく。 ◆子ども達が準備ができるように小道具や楽器等を準備しておく。
12月16日 ○友達と協力して一つのものを創りあげる楽しさを味わう。 ・友達と気持ちを合わせて「山の音楽会」に取り組み、満足感を味わう。	☆友達と協力して楽しく表現できるように、励ましたり、褒めたりしながら自信がもてるような言葉かけをしていく。 ◆自分達ですすんで準備できるように小道具や環境を整える。

(5) 本時の指導案

指導案平成 28 年 12 月 15 日 (木)		たんぼぼ組 男児 10 名 女児 19 名 計 29 名 保育者: 高原 真紀乃		
＜主な活動名＞		山の音楽会をしよう		
研究 仮 説	◎教師が幼児理解をし、 幼児の興味関心を取り入れ、 保育を工夫した表現し合う活動の中で、 幼児の人とかかわる力が育まれるであろう。 具体仮説①自己抑制が苦手な子が表現し合う活動の中で、自己抑制の芽生えがみられるであろう。 ②自己主張が苦手な子が表現し合う活動の中で、自己主張の芽生えがみられるであろう。			
ね ら い	○友達と一緒に表現する 楽しさを味わう。	内 容	・友達と一緒に歌や楽器を使って表現を楽しむ。 ・友達のさまざまな表現を見て楽しむ。	
時間	○予想される 幼児の姿	◎教師の援助と☆環境構成		
10:00	○「山の音楽家」のブラ ックパネルシアターを 見る。	☆ブラックパネルシアターを準備する。 舞台 パネルシアター 小道具・楽器 ○ 披露するグルー プに座る ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○		◇幼児が集中して ブラックパネル シアターを見て いるか。
10:10	○今までの活動を振り返 る。			
10:15	○友達と一緒に楽器を演 奏する。 『山のきらきら星グルー プ』 『山の音楽家グループ』 『山のくまのエイサーグ ループ』 ○友達と協力して楽しく 披露する。 ○恥ずかしがって、声 が小さくなったり、動作 が小さくなったりす る。 ○友達が披露している様 子を見て応援したり、 一緒に口ずさんだりす る。	◎歌のイメージが膨らむように楽しい雰 囲気で歌を唄いながら見せる。 ◎今までの活動を振り返り、今日の活動に ついて話をし、幼児の表現意欲を高める ようにする。 ☆事前に小道具と楽器をテーブルに準備し ておく。 ◎友達のアイディアを認め、共感できるよ う、教師がモデルとなって幼児の思いを 受け入れる。 ◎幼児がイメージした事を丁寧にくみ取り 他の幼児にも刺激となるよう 配慮する。 ◎友達と協力して楽しく披露できるように 見守りながら、必要に応じて声かけな どの援助をする。 ◎できる、できないではなく、やろうとす る姿を認め、表現する意欲につながるよ うに励ます。 ◎友達と一緒に表現した満足感や充実感を 味わえるようにする。 ◎クラスの皆で手話ソングを唄い、楽しい 雰囲気をつくる。 ◎今日の活動で楽しかったことや思ったこ となどを子どもから引き出し、明日につ ながるようにする。 ◎明日は本番ということを伝え、意欲を高 めていけるような言葉かけを行う。		◇幼児が喜んで活 動に参加してい るか。 ◇友達と一緒に楽 しんで表現して いるか。 ◇友達の表現に興 味を持って見て いるか。
10:45	○「さんぽ」の手話ソ ングを歌う。			◇友達や教師と共 に歌うことを楽 しんでいるか。
10:50	○今日の活動で頑張った ことや友達の頑張っ ていたところを発表する ○教師の話を聞いて明日 も頑張ろうと意欲をも つ。			◇自分の感じたこ とを言葉で表現 しているか。 ◇明日への意欲が みられるか。
評価 の 観点	・ 幼児が友達とかかわりながら活動できるような援助ができたか。 ・ 幼児が表現したいと思えるような話の進め方や雰囲気作りができたか。 ・ 幼児が自己を発揮し、楽しんで表現できるような援助や声かけができたか。			

披露するグループ

※これまでの表現し合う遊びの過程において、子ども自ら選び集まったグループ

『山のきらきら星グループ』	『山の音楽家グループ』	『山のくまのエイサーグループ』
楽器が好きな子ども達が集まったグループ。カスタネット、すず、タンバリン、鉄琴、木琴を用いて「きらきら星」の曲を演奏する。	色々な材料を使って手作りの楽器を作り、この楽器を用いて「山の音楽家」を唄いながら演奏したいと集まったグループ。	エイサーが好きな子ども達が集まったグループ。「年中口説」の曲に合わせてパーランクーを打ち鳴らして踊るグループ。

5 検証保育研究会

(1) 保育者の反省

- ・本時に至るまでの過程において、友達とグループ活動を通して互いに考えを出し合う活動を重ねていく中で、幼児は他者の思いを理解して自己抑制したり、自分の思いを他者に伝え、受け入れられた喜びからのびのびと自己主張する姿を見ることができて良かった。
- ・本時の時間配分は、思っていたよりも子ども達は自分達で準備や片付けを早く済ませてしまい、指導案の時間よりも早く時間が過ぎてしまった。そのため、最後に振り返りとして教師が長く話をしすぎた所があった。最後はもう少し、子ども達の頑張った事や友達の頑張っていたところを聞き合う時間をもっと長くとるべきだと反省する。

(2) 意見及び感想

- ・最後の時間はこうしたらもっと良くなるという全員で考えて話し合いをするという時間があっても良かったのではないかなと思う。
- ・明日は、クラスの皆で『山の音楽会』を他のクラスの子達に見せるということから、明日への意欲を高めるための教師の言葉かけは大切である。もっと言葉かけの工夫が必要であったと思う。

(3) 指導助言（琉球大学准教授 中尾竜馬）

- ・各グループそれぞれ友だちと一緒に楽しく表現し合っていたのは良かったと思う。
- ・最後全員で歌いながら手話をする場面は座ってやるより、立ってやったほうがもっと楽しく表現して盛り上がったのではないかなと思う。
- ・最後にまとめて各グループの良かったところを教師が話をして伝えていたが、最後だと子どもは忘れているということもあるので、グループが披露した後すぐにそのグループのよさやこれまでの経過等を伝えてあげたほうが良い。

VI 仮説の検証

◎教師が幼児理解をし、幼児の興味関心を取り入れ、保育を工夫した表現し合う活動の中で、幼児の人とかかわる力が育まれるであろう。

具体仮説①自己主張が苦手な子が表現し合う活動の中で、自己主張の芽生えがみられるであろう。

②自己抑制が苦手な子が表現し合う活動の中で、自己抑制の芽生えがみられるであろう。

1 ビデオ記録とエピソード記述から幼児の姿を捉える

本研究では、研究テーマに沿った保育実践を行い、幼児の姿やその変容から検証を行う。その対象を「クラス全体」と、著しく変容の見られた幼児2名の姿をもとに検証を行う。「抽出児A」と「抽出児B」とする。具体仮説①は「抽出児A」で見取る。具体仮説②は「抽出児B」で見取る。

エピソードでは、教師による援助や保育の工夫を波線「~~~~~」、幼児の変容が見られた言動や行動を二重線「====」で示す。

検証前の様子	
クラス全体	進級児5名、保育所より入園21名、初めての集団保育2名、途中転入1名の計29名のクラスである。自己主張が強い子が多く、自分の思いや意見を通そうとして、言い合いや腕力で解決しようとする場面が多く見られる。また、個人差があり、自分の考えを強く主張する子と、逆に自分の考えを出せずにいる子の差がみられる。
抽出児A	入園前は保育所での集団経験があるが、入園当初は緊張した表情で、一人で静かにブロックを組み立て遊ぶ姿がみられた。幼児との信頼関係を図りながら徐々に友達関係をつくっていきけるようにした。5月後半になると、気の合う友達を見つけることができ、その友達と一緒にいることで安定し、側についている。しかし、遊びにおいて自分の思いを話すことは苦手で、友達にややリードされがちである。 〈教師の願い〉 本児の心の安定を図りながら、友達のよさに気づくことで、かかわりを深め、自己主張ができるようになって欲しい。
抽出児B	入園前は保育所での集団経験がある。入園当初はすぐに気の合う友達を見つけ、一緒に絵を描いて遊ぶ姿がみられた。しかし、友達と遊ぶ際に他者の思いを気にせず、自分の思いを主張しがちである。思い通りにならないと大声で怒鳴ったり、叩いたりするなど、友達とのトラブルが多い。 〈教師の願い〉 本児のよさを生かしながらも、友達とのかかわりにおいて友達の思いに気づき、自己を抑制して友達の考えを受け入れたりすることができるようになって欲しい。

環境構成の工夫

いつでも自由に触れて楽しめるように、楽器を部屋のコーナーに用意しておく。



図1 楽器を自由に使えるように用意して置く

みんなで楽器遊び

（背景）

物語や歌に親しみ、友達と一緒に楽器を使って歌を楽しむとのねらいのもと、クラスでのひとときにおいて、教師が作ってきた童謡『おもちゃのチャチャチャ』のペープサートをクラス全員に歌を唄いながら見せる。まずは、演奏の仕方よりも子ども達に曲の情景を伝える。その後、教師が用意してあった楽器の中から、自分の好きな楽器を選び、クラスみんなで歌を唄いながら楽器の音を楽しむことを提案する。

クラス全体

クラスみんなで楽器を使って歌を楽しむことが初めてなので楽器を手にとると喜び、それぞれ音を鳴らして楽しむ姿が見られた。全員で歌を唄いながら音を合わせる時も、「チャチャチャ」というリズムに合わせることを楽しんでいた。

抽出児A

A児はカスタネットを選ぶ。カスタネットの上下を逆さに持っていた。A児は周りを見ながら、不安そうな表情で音を出している姿がある。何度か歌を唄って演奏を繰り返すうちに、隣の子を見ながらカスタネットの持ち方が逆である事に気づき、自分で持ち直していた。そして周りの子に合わせてカスタネットの音を鳴らす姿が見られた。



図2 『おもちゃのチャチャチャ』
ペープサート

抽出児B

B児は好きな楽器を選び、早く全員で歌を唄って音を合わせたい様子。意気込んでいるB児は、楽器を好きなように鳴らしている周りの子ども達を叱責している。「みんなうるさい！やらないで！」と大きな声で叫んでいる。この様子を見て、教師は楽器を鳴らしたくなる他者の気持ちがあるということをB児に気付いて欲しくて「みなさん。初めてだから楽器やりたい気持ち分かるよ。」とクラスみんなに向かって言葉をかけた。そしてB児の気持ちも汲み取り、「でも音が大きすぎるとびっくりするお友達もいるから小さく鳴らしてみようか。」と周りの子たちに話した。周りの子は教師の声かけに気がついて小さく楽器を鳴らす。しかしその後も、B児は楽器を自由に鳴らしている子達に対して静ませようとやや強い口調で叱責する姿が見られた。クラス全員が音に親しんで落ち着いた様子を見て歌を唄いながら合わせようと話し合う。B児は元気よく歌を唄って楽器を演奏した。皆で歌を唄いながら音を合わせたことにB児は満足した表情となった。

考察

A児は、ペープサートや歌のみの場合は関心を示さない。楽器の使い方も説明をしたのだが、実際に楽器に触れるとどうやっていいのかわからない様子であった。しかし、隣の子を見ながら楽器を鳴らすことができた。友達の側で見て真似ることで安心感をもち、行動していることがわかった。

B児は楽器を使って歌を唄うことにとても意欲的であった。早くみんなで音を揃えたいという気持ちから、最初自由に楽器を鳴らしている周りの子に叱責して静ませようとしていた。言い方がきつくて周りの子に嫌な気持ちをさせてしまう姿が見られる。このころは、他者をたしなめることはできるのだが、言い方を優しく言い換えることや、他者の思いや感情に気付いていないように推察される。

楽器作り

（背景）

友達と一緒にイメージしたことを製作などで表すことを楽しむというねらいのもと、子ども達に「いろんな材料を使ってどんな音が作れるかな。」と話し、発砲スチロールの容器、カップ、空き缶などの材料を見せ、それぞれの作りたい音や楽器のイメージを製作することで表現できるようにしていった。

クラス全体

ギターや太鼓、ドラムなど、自分の好きな楽器を工夫して作っている姿がみられた。作った後は、楽器を使って友達と一緒に歌やダンスをしながら演奏している姿が見られた。

抽出児A

隣の子を見ながら空き缶に画用紙を包んで製作に集中しているA児。太鼓をみたてて作る姿が見られる。

抽出児B

B児は空き缶を使って自分のイメージする鉄琴とみたてて工夫して作る姿があった。



図3 子どもたちの作った楽器を展示

考察

クラスの殆どの子が、楽器のイメージが膨らみ、音を表現するためにさまざまな材料を使って製作をする姿が見られた。作っていく過程で、クラスの多くの子が友達の作っている楽器を見ながら刺激となって自分でも工夫していく姿もあった。友達の表現のよさに気がついたと捉える。また、作った楽器で友達と共に歌ったり踊ったりして演奏を楽しみ、達成感を味わっていることが分かる。

A児とB児も自分の作りたい楽器の製作を通して自分の考えを表現していることが捉えられる。活動の後、友達の作った物を見て友達のよさに気づいて欲しいと考え、子ども達が作った楽器を目の届く場所に展示した。

12月6日（検証場面③）

きらきら星

（背景）

友達と一緒に歌の内容のイメージを膨らませながら歌を楽しむというねらいのもと、手作りのステンドグラス風紙芝居で童謡『きらきら星』を歌いながら見せる。室内を暗くしてステンドグラス風紙芝居の後ろから照明の明かりをつけ、『きらきら星』の歌のイメージを感じてもらえるように雰囲気づくりを行う。

クラス全員で『きらきら星』の歌を唄いながら、歌の内容のイメージをもたせていくように、鉄琴を用いて効果音として歌に合わせて演奏して見せる。



図4 ステンドグラス風紙芝居

クラス全体

子ども達は教師と一緒に歌を楽しむ姿がみられた。その後、部屋で自由に友達と一緒に『きらきら星』を唄いながら鉄琴や木琴の音を鳴らしている。自分で音を探したり、友達に音階を聞いたりして、互いに教え合う姿も見られた。

抽出児A A児は、木琴に興味をもち、自主的にパチを持って音を鳴らして遊ぶ姿が見られた。

抽出児B B児は、鉄琴に興味を示し、朝登園してすぐに鉄琴に触れて『きらきら星』を歌いながら音を鳴らして楽しむ姿が見られた。

考察

紙芝居の読み聞かせは、普段とは違い、室内を暗くして照明を使った手作りスタンドグラスの紙芝居を行ったことで、子ども達は歌の内容のイメージが膨らんだのではないと思われる。部屋で友達と楽器を使って音を楽しむ姿もあったことから、友達と歌の内容のイメージを共有し、表現し合う楽しさを味わっていると推察する。

A児とB児は楽器に興味をもち、自分から楽器に触れて遊ぶ姿から主体性が見られる。

12月7日（検証場面④）

友達と一緒にエイサーを踊る

（背景）

友達と一緒に踊る楽しさを味わうということをねらいとして、日頃から見たり踊ったりして慣れ親しんでいるエイサーを題材とした絵本『エイサーだいこでちむどんどん』を読み聞かせをする。その後、パーランクーを手に持ち、クラス全員でエイサーを踊ろうと話し合う。

クラス全体

夏休みにお祭りでエイサーを見たことがあるという経験や、保育園の時に踊ったことがあるという経験から、どの子もエイサーのリズムに合わせて楽しそうに踊る姿が見られた。

抽出児A

読み聞かせが終わった後、自分から教師に「先生、紐のついた太鼓は？」と絵本に載っていた大太鼓を要求してきた。教師は「Aさん。ごめんね。幼稚園には大太鼓はなくてパーランクーしかないの。」言うと、A児は「分かった！」と納得した表情を見せた。その後、自分でパーランクーを持って笑顔でエイサーを踊る姿が見られた。その姿を見て教師は、「Aさん。エイサー上手だね。かっこいいよ。」と認める言葉かけを行った。その後も笑顔で踊るA児であった。



図5 絵本『エイサーだいこでちむどんどん』

作：松田幸子 絵うえずめぐみ
ジグゼコミュニケーションズ

考察

これまでにエイサーを見たり踊ったりしたことがあるという経験から、クラスの子殆どの子が笑顔でかけ声を合わせて意欲的にエイサーを踊る姿があった。翌日も登園してすぐに、パーランクーを持ち、友だちと一緒に踊る姿も見られる。

A児も主体的に「大太鼓を持ちたい」と教師に希望を話したり、パーランクーを手にすると笑顔でエイサーを踊ったりする姿が見られる。エイサーを通して意欲的に自己主張する姿が見られた。

B児はこの場面においては、とくに変容は見られなかった。

12月12日（検証保育⑤）

好きな音楽のグループづくり

（背景）

これまでの活動で歌や楽器に親しんできた。一人ひとり様々な方法で歌を表現しているので、今度は自分の好きな音楽に分かれてグループをつくり、演奏をしてみようと話し合いをする。そして誕生会の出し物として、他のクラスの子たちにも披露しようと提案した。音楽会のイメージがもてるように、絵本『山の音楽家』を読み聞かせする。登場してくる山の動物達は楽器を持って演奏している。絵本の内容のイメージをもち、子ども達も自分の好きな楽器を選び、グループに分かれて表現し合うことを話し合う。

好きな楽器を選び集まったグループは、どの歌がいいか、必要な道具は何かと相談しながら活動を行った。

クラス全体

グループの友だちと必要な道具を作ることを話し合う姿が見られる。なりたい動物のお面を作ったり、友達と歌と楽器の音を合わせようとする姿が見られた。

抽出児A

A児は絵を描くことは苦手なようで、友達を見ながら動物の絵のお面を作る姿が見られた。



図6 絵本『やまのおんがくか』
訳詩：水田詩仙 構成・絵：鈴木幸枝
ひさかたチャイルド

抽出児B

B児は、最初一人で考えて木琴にみたてて楽器を作り、音を楽しんでいたが、活動の半ばから友達が作っているマラカスを真似て作り出した。教師が理由を聞くと、B児は「一人は嫌だから、友達と一緒にいい。」と話した。

考察

クラスの殆どの子が、好きな楽器を決めて友達とグループを作り、小道具を作ったり、歌に合わせて仲間と一緒に演奏したりする姿が見られ、友達と互いの考えを伝え合いながら活動を進めていく気持ちが表れていると捉える。

A児は友達を見ながら動物のお面を作っている姿があった。友達がいることで安定して絵を描いていることが捉えられる。

B児は活動において最初一人で楽器を作って音を楽しんでいたが、活動の半ばから一人は嫌だという気持ちで友達を求め、同じ楽器を作る姿があった。友達と仲間関係を作りたいという意欲の育ちが見られた。

12月13日（検証保育⑥）

小道具作り

（背景）

グループ活動を行う。それぞれのグループでイメージを伝え合いながら、小道具作りを行っていく。必要となる材料を用意する。

クラス全体

エイサーを踊るグループは、エイサーに必要な旗を作っていた。大きな画用紙にクレヨンで自由に描いていた。描き終えた旗を見ると、上下が無く、四方八方に描かれていた。教師は子ども達に気がついてほしくて、その出来上がった絵を棒に付けてみた。

「棒に付けてみたよ。どうかな？」と子ども達に聞いてみた。

C児「あれ。人間が横になっている。側転しているみたい。」

D児「おうちが逆さまになっている。」グループの子ども達は気がついた。

教師は、「本当だ。どうしようか？」と子ども達が自分たちで考えて解決できるように言葉かけをした。

C、D児「もう1回描く！」

意欲を高めるために「みんな上手だから次はもっとカッコいい旗ができるね。次はみんなの描きたい絵をどの場所に描くか相談するといいね。」と話した。

抽出児A

A児は不安な様子で、友達が描いている様子をじっと見ている。教師が声をかけると、A児は「A、下手だのに。」とうつむいている。教師「そんなことないよ。上手だよ。」と言葉をかけたが、自信なさげな表情のA児。おそらく心の中で葛藤しているのか。A児は友達と協同して描くことにとまどいがあり、失敗を恐れているように思えた。教師は間違っても消せる鉛筆をA児に渡してみた。A児はほっとした様子で、鉛筆で大きな画用紙に友達の次にR児の絵を描き足す。何回も消しゴムで消したりしながらも、一生懸命描いていた。

抽出児B

B児は友達と一緒にお面作りを楽しむ姿が見られた。



図7 最初にみんなで描いた旗



図8 友達と相談しながら描いた旗

考察

エイサーには旗が必要だと感じ、グループのみんなで作るようになったが、最初の絵はおのの自由で描かれていた。棒に付けて見ると、上下があることに気がつき、もう一度描く。二度目はそれぞれの描きたい絵を擦り合わせてどこかの位置に描くか相談をしながら絵を描いていた。このことから、協同して描く絵は自分の思いだけでなく、友達の思いにも気付くことができる効果があると捉えた。

A児は最初自分の好きなように絵を描いていたが、再度描く時は協同して旗を作るという不安から、「下手だから」と言って描くことを躊躇していた。教師がA児の気持ちを理解し、鉛筆で描くことを提案したり、A児を認める言葉かけを行ったことから、絵を描くことができた。友達との協同絵画で自己主張や自己表現の経験をしていると捉える。

B児はグループの友達と一緒にお面を作って楽しむ姿から、友達との活動の楽しさを味わっていると捉える。

12月15日（検証保育⑦）

山の音楽会をしよう

（背景）

これまでグループに分かれて取り組んできた表現を見せ合う場を設定する。子ども達のイメージを膨らませ、表現し合う意欲を高めていくため、『山の音楽家』のブラックパネルシアターを見せる。その後、3グループの表現を披露していく。

クラス全体

グループの表現を見せ合うことが嬉しいようで、自分の作ったお面を身につけると、意欲的に歌を唄いながら表現する姿が見られた。また、表現している友だちを見て「頑張って」と応援する子たちもいた。

抽出児A

A児は披露する前に、教師に「旗は誰が持つの？」と尋ねてきた。A児が旗を持ちたいという意欲があることを受け止めつつ、自分から友達に思いを伝えて欲しいと考え、「グループの皆と相談して決めたら？先生も一緒に話してみるよ。」とA児に話をした。A児はグループの友達の前へ行き、「旗、Aが持ってもいい？」と小さな声であったが、話すことができた。グループの子達は「いいよ」と受け入れていた。

A児はグループの仲間へ旗を持つことを了解してもらえたことが嬉しかったようで、誇らしげに旗を持ってエイサーのリズムに合わせて表現していた。

抽出児B

B児のグループでは、誰が「札」と言う合図をするか話し合いをしていた。B児は「Bがやりたい」と気持ちを表わしていた。しかし、B児の友達E児もやりたいということを知り、譲ってあげていた。教師が理由を尋ねるとB児は「だってEがやりたいって言うから、Eはあまりやったことないからやってもいいと思ったから」と笑顔で応えた。教師はB児の友達に対する思いやりを認め、さらに伸ばしたくて「Bさんは優しいね」と言葉をかけた。

考察

自己主張が苦手なA児は、グループの友達に自分が旗を持つ役目として受け入れてもらえたという嬉しさから舞台上で誇らしげに旗を持ってリズムに合わせる姿が見られた。A児は友達の中でも自己主張ができるようになったと捉える。

また、自己抑制が苦手なB児はこれまでは自分のやりたい気持ちを通す面があった。グループの号令の合図を誰がやるか決める時に、B児もやりたいと意思を表わしていたのだが、友達も号令をやりたいということを知り、譲る姿があった。友達のために自己を抑制し、友達との折り合いをつけることもできるようになったと捉える。



図9 ブラックパネルシアター

検証保育後の様子
(背景)
2月上旬に行われる予定の生活発表会に向けて、クラスで出し物の取り組みが始まっている。クラスの出し物は『山の音楽家』を膨らませた内容で、楽器を増やし、クラス全員で合奏に取り組んでいる。
クラス全体
生活発表会という大きな行事に向かって活動することに、ほとんどの子が <u>意欲をもって取り組んでいる。友だちを誘い合い、共に音を合わせて歌を唄う姿が見られた。</u>
抽出児A
A児はタンバリンを選び、 <u>友達と一緒に自信をもって音を合わせることを楽しむ姿が見られた。友達が見ている前でも恥ずかしがらずにタンバリンを振って踊る表現を楽しむ姿があった。</u>
抽出児B
B児はハンドベルを選び、 <u>友達と一緒に音を確認しながら歌に合わせることを何度も行っていた。自分のハンドベルを友だちに貸せたり、友達が間違っても笑い合ったりするなど、笑顔で楽しむ姿が見られた。</u>
考察
クラス全体では、生活発表会という共通の目的に向かって、友達と協力して取り組む姿が見られる。自分たちで楽器を準備して音を合わせていこうという姿も見られ、協同する気持ちが育ったと思われる。
A児とB児二人とも検証後は、 <u>友達と共に楽器を使って音を合わせることを喜んで取り組んでいた。A児は人前でも笑顔で披露する姿も見られるようになった。人前で歌や踊りを披露する経験を重ねたことから、自信がつき、自己発揮できたと推察する。B児は楽器を友達に貸せたり、間違っても怒ったりせずに笑い合う姿もみられ、友達のことを認め、他者を思いやる気持ちが育っていると捉える。</u>

2 検証のまとめ

(1) クラス全体・A児・B児の変容

本研究では、幼児の人とかかわる力を育むために、幼児理解をし、幼児の興味関心を取り入れ、保育を工夫した表現し合う活動からアプローチしていった。

クラス全体では、『山の音楽会』を行うまでの表現し合う活動のプロセスの中で、共通の目的を持ち、それぞれのグループにおいて歌や踊りのイメージを膨らませながら、自分の思いや考えを相手に伝え合ったり、聞き入れたりしながら取り組む姿が見られた。『山の音楽会』では友達と共に音を合わせることを意識しながらそれぞれ表現を楽しんでいた。『山の音楽会』を終えた後、子ども達に感想を聞くと、「みんなと楽器の音を合わせることを頑張った」「みんなで唄うことを頑張った」と声が聞かれた。友達と一緒に楽器を使って歌や音を共に合わせて奏でいくことの喜びやグループの仲間と協力してやり遂げた達成感を味わったと推察される。また、友達の披露している姿を見て「頑張って」と応援する気持ちも見られ、クラスの仲間意識が深まったと考えられる。検証後もひき続き、友達と協力して楽器を使って表現し合う姿から、仲間と協同する力が育ったと捉えられる。

自己主張が苦手なA児は、検証場面①では、友達の側にいて友達を見ながら楽器を鳴らすことで安心感を図っていたが、検証場面④で好きなエイサーを踊る時は、自分から教師に太鼓を要求して自己主張ができた。また、検証場面⑥の『山の音楽会』に向けてのグループでの旗作りにおいては、葛藤しながらも友達の中でも自分の絵を描くことができた。そして検証場面⑦では、旗を持つ役割を任せられたことの嬉しさから、友達と共に笑顔で堂々と自己発揮してエイサーを踊る姿がみられた。以前のA児は控えめで物静かな性格で、自分から行動するということは見られなかったのだが、エイサーを踊る時は主体的に旗を持ってリズムに合わせる姿が

見られた。A児は教師や友達に自分の思いを受け入れられたことから自己主張ができるようになったと考えられる。検証保育後は、人前で自分の表現を披露する経験を重ねていることから、恥ずかしがらずに自己発揮することができるようになった。

自己抑制が苦手なB児は、『山の音楽会』に向けて意欲的であった。検証場面①において、周りの子に対して「静かにして！」と自分の思いを通そうと叱責する姿があった。検証場面⑤では、楽器の演奏は自分一人で行うB児であったが、次第に「一人は嫌だから」と考え直し、「友達と一緒にいい」と友達を求めて活動をすすめていく姿がみられた。検証場面⑦では、グループの発表する号令の合図をやりたいと意思表示をしていたが、自分の友達もやりたいと希望していることを聞き、号令の合図役を譲ってあげる姿が見られた。検証保育後も友達に楽器を貸す姿や間違っても笑い合い、音を合わせることを楽しむ姿があった。これらのことから、表現し合う活動において仲間との協同の楽しさを味わうことができ、B児の自己を抑制する力と友達への思いやりが育ったと考えられる。

(2) 保育の工夫

幼児の人とかかわる力を育むために、表現し合う活動を通して研究をすすめていった。その中で、楽器を自由に触れて楽しめるように部屋にコーナーを作り、楽器を整えて置いたり、幼児の手作り楽器を展示したりなど環境を工夫した。また、音楽にイメージがもてるような教材の工夫や幼児理解に努めながら興味関心を取り入れたり、幼児を認める言葉かけや援助などを工夫していった。表現し合う活動の中で、幼児は思ったことや感じたことを表現し、友達の中で自己主張が芽生えた。また、友達の思いに気づき、自分の気持ちを抑えるなどの自己抑制が芽生えた。教師が幼児理解をし、興味関心を取り入れ、保育を工夫した表現し合う活動の中で、協同の楽しさを味わい、人とかかわる力が育まれたと考えられる。

Ⅶ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 幼児の発達段階を踏まえた人とかかわる力を育むための年間指導計画を見直し、再検討を図った。友達と一緒に表現し合う遊びを通して、幼児の自己主張や自己抑制の芽生えが見られた。
- (2) 教師が幼児理解をし、興味関心を取り入れ、保育を工夫した表現し合う活動を通して、幼児が興味関心を持ち、友だちと一緒に関わりながら活動し、共に歌や音を合わせることの喜びや協同の楽しさを感じ、人とかかわる力が育った。

2 今後の課題

- (1) 本研究においては、幼児の正の感情が主に出て、その中で自己主張や自己抑制がみられたが、他者とのいざこざにおける負の感情が伴う経験についての自己主張や自己抑制は、未検証である。今後もひき続き、幼児理解に努めながら、友達同士のかかわりを深めていき、いざこざや葛藤などの経験も積み重ね、自己主張や自己抑制が芽生えるように保育を工夫していく。
- (2) 幼児の人とかかわる力を育むために、本研究では、課題活動を中心に表現し合う活動を取り入れたが、今後は、一日の生活の中においても、自己主張や自己抑制が芽生えることができるように援助を工夫していくことが重要である。

【註】

- (1) 文部科学省『幼稚園教育要領』、2008年。
- (2) 畠山寛『保育内容「人間関係」』北大路書房、2003年、62頁。
- (3) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年90頁。
- (4) 砂上史子「遊びのなかで育つ人とかかわり」森上史朗・吉村真理子・後藤節美編『保育内容「人間関係」』ミネルヴァ書房、2001年、89頁。
- (5) 文部科学省幼児教育部会『幼児教育部会における審議の取りまとめ』文部科学省、2016年、資料1。
- (6) 黒川健一・高杉自子編『保育内容「表現」』ミネルヴァ書房、1990年、15頁。
- (7) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年、159頁。
- (8) 砂上史子・平田智久・小林紀子編『保育内容「表現」』ミネルヴァ書房、2010年、29頁。
- (9) 鯨岡峻・鯨岡和子著『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房、2009年、21頁。
- (10) 森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典 第5版』ミネルヴァ書房、2000年、174頁。